

3 明の宇宙留学

あきら
うちゅうりゅうがく

一年前の四月一日、明は初めて種子島にやってきました。鹿児島市から船で四時間。やっと見えてきた種子島は、ほとんど平地で高い山はなく、海の色がとても青く感じられました。明はこれから宇宙留学生として一年間、この種子島の南種子町に住むことになっているのです。

明は、長野県から宇宙留学生におうばしました。長野県には海がありません。雪国で山の多い土地に住んでいた明にとって、一年中あたたかい気候と、青くすき通った海を身近に感じて生活するのが夢だったので。それに、何と言っても種子島には宇宙センターがあり、ロケット見学やいろいろな体験ができるというみりよくが明をとりこにしました。明は、しゅう来、宇宙飛行士になりたいという夢をもっているのです。その夢の第一歩を踏み出すためにも、どうしても種子島に来たかったです。

種子島のお父さんとお母さんに初めて会ったときは、きん張と不安で言葉が出ませんでした。お父さんが、

「これからここを自分の家と思って生活してくれ。えんりよなんかしたらだめだぞ。」

と、きん張をほぐしてくれました。(やさしそうなお父さんだな。楽しくやっていけそうだな。)と、明は少し安心しました。

ところが、それから一か月、だんだん明は暗い気持ちになつてきました。お父さんが、とにかくきびしい人だったのです。家に帰って、明が仕事をしていると、お母さんが手伝ってくれます。するとお父さんは、

「よけいなことはしないでいい。一人でできるんだから、自分でさせなさい。」

と、きっぱりと言うのです。くつあらいやふるそうじなどほとんどしたことがなかった明にとって、がみがみ言われることはいやでいやでしかたがありませんでした。(くつあらいやふるそうじをするために、種子島に来たんじやない。) そんな気持ちで明はお父さんにだんだん話をしなくなり、家に帰るのもいやになってきたのです。特に、雨が



降ったり、夜になったりするとさびしくなり、長野の家に帰りたいたいという気持ちからか、自然になみだがあふれることもありました。

そんなときのある夜、種子島のお母さんがぽつりと話をしてくれました。

「お父さんは、あなたに、ここでりっぱに成長してほしいと思っているのよ。世の中には、つらいことや苦しいことが数え切れないくらいあるのよ。それに負けないたくましい人間になってほしいの。自分のこともできない人が、新しいことにちょう戦できるかしら。今、あなたにとって何が必要なのか考えて、きびしくしているんだと思うわ。」

お母さんの話を聞きながら、明は、種子島に何を学ぶために来たのだろうと考えました。「宇宙飛行士になりたいという思いが強かった。けれど、ここで学ぶことはそれだけだろうか。」と考え、明はねむれない夜を過ごしました。

次の日、「宇宙の話を聞こう」という会で先生が、

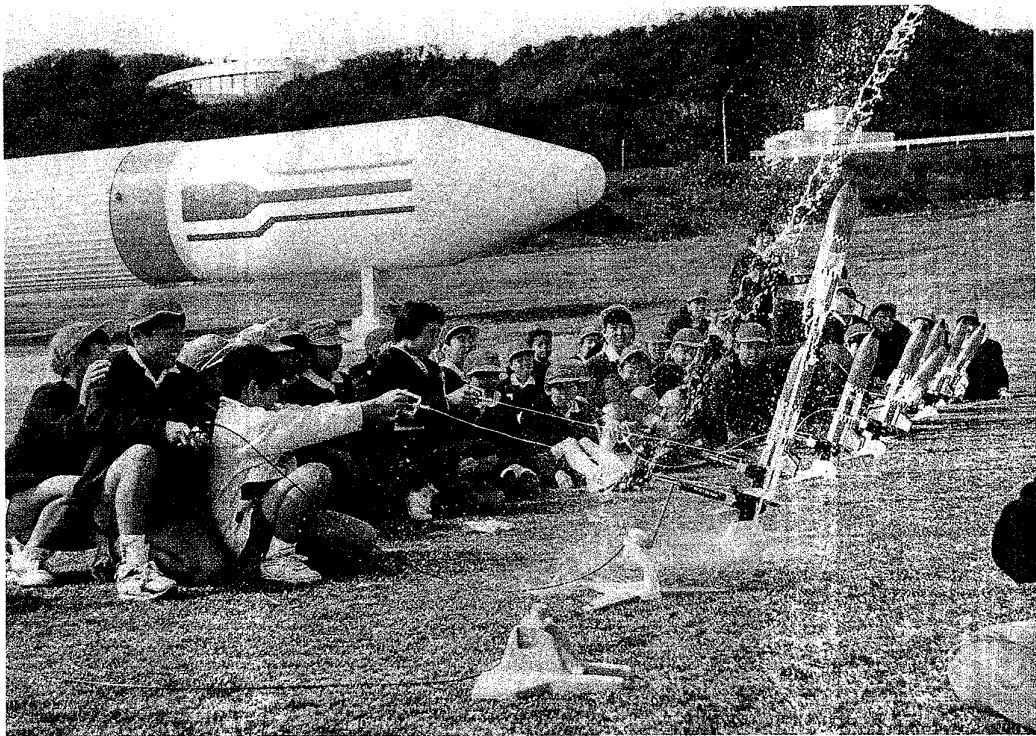
「今、種子島宇宙センターでは、日本ばんスペースシャトルを打ち上げる研究を進めています。しかし、ここまでするのに三十年以上かかりました。最初はペンシルロケットといって、ボールペンぐらいのロケットからスタートしました。それからは何回も失敗しましたが、あきらめることなく、失敗のたびに原因を全員で考え、工夫しながら今日までやってきました。みんなもこれ

からいろいろな体験をして、自分の夢をかなえてください。」

と、話をしてくれました。その話を聞くうちに、長野では学べないことを体験し、自分を変えようとしてこの種子島にやってきたのに、自分の弱さに負け、すぐ帰ろうと考えたことがはずかしく思えてきました。そして、ここの生活をがんばり通すことで、新しい自分に気づき、宇宙飛行士になりたいという自分の夢もかなえられるような気がしてきました。

それからです。種子島の生活をより楽しくしていくために、自分から積極的に行動するようになったのは。

明は種子島に来て、初めて「宇宙少年団」があることを知りました。明はさっそく少年団に入り、宇宙についての勉強を始めました。水ロケットも自分一人で作りました。しかし、うまく飛びません。友達の水ロケットは遠



くまで飛んでいます。今までの明だったらすぐ投げ出してしまふところですが、今の明は違います。友達と自分の水ロケットをくらべてみました。すると、いろいろな違ちがいがあることに気づきました。一番違うところはペットボトルに入っている水の量でした。明は水を多く入れ過ぎていることに気づきました。水と空気を入れぐあいを変えてみると、何と五十メートルも飛びました。夏には、全国の団員が種子島に集まり、ロケット基地の見学や活動の様子を発表し合ったり、夜遅くまで宇宙についての夢を語りあったりしました。こうして、(自分だけよければいいや。)という気持ちが強かった明にとって、ここでの生活は新しい発見の連続になっていったのでした。

待ちに待った、ロケット発しゃの日です。

「六・五・四・三・二・一・〇・発ゼロしゃ・・・」

アナウンスが聞き取れないほどのばく音と、地球をゆるがすような地ひびきが、明の体をふるわせます。白いけむりが、ロケットの底からもくもくとわき起こり、まばゆいばかりの黄金の光を放ちながら、ロケットはゆっくりと大空へすいこまれていきます。

「飛べ、飛べ、飛べ。ぼくの夢を乗せて、宇宙まで飛んでいけ。」
と、明は大きな声でさけんでいました。